審査の結果の要旨

氏名　小松　孝至

子どもが自分自身の経験について物語るという行為は，子どもの自己概念や認知発達の研究において，その重要性が指摘されてきた。しかし，このテーマに関する従来の研究では，子どもの語りを実際の生活文脈から切り離し，研究者によって人工的に設定された場での語りを取り上げることがほとんどであった。本研究は，子どもの自然な生活の中で日常会話に埋め込まれた語りを取り上げることの重要性を指摘し，そうした会話において子ども自身がどのような存在として自らを語っているか，そしてこのような会話が生活の中でどのように意味づけられているかを，幼稚園・保育園（以下，園とする）に通う幼児を対象にして，初めて本格的に検討したものである。

第１章で上記の問題意識を述べた後，第２章では，園での経験に関する母子の会話を取り上げる意義を明らかにしている。園という，家庭とは質的に異なる空間で家族と離れて一定時間を過ごすことによって，子どもの側に物語る対象としての世界が成立する。降園による母子の再会は，そこでの経験を想起・再構成する契機となり，その会話は母子の親和的な関係の形成と子どもの経験の共有の重要な機会となることが述べられている。

第３章では，園児の母親を対象とした質問紙調査（６園 581 名，うち３園 235 名については時期を変えて２度実施）によって，子どもが園での経験を語るとき，どのような内容が語られるのか，その会話に子どもはどのように参加しているのか，そして母親自身はその会話にどのような意義を感じ，どのような働きかけを行っているのかを検討している。その結果，会話内容は子どもが経験した肯定的な感情や有能感を表すものが最も多く，子どもはこの会話に積極的に参加しており，この会話が肯定的な存在として自己を位置づける意味をもつことが示された。母親はこの会話に対して情報収集としての意義や経験を共有する意義を認めているが，その意義づけの程度と会話への働きかけの特徴に相関関係がみられること，またその関係のあり方が子どもの年齢によって異なることが示された。

第４章では，７組の３歳児母子の会話を録音して分析するとともに，母親へのインタビューを行っている。その結果，他者との関係の中に子どもを位置づける内容の会話は，この年齢では母親が主導していること，家庭と園との場面的および時間的連続性をもつ存在としての子どもが母親によって描かれること，母親は子どもの園生活についてもっと知りたいと思いつつ独自の世界も尊重したいという葛藤を感じていることなどが見出された。続く第５章では，１組の母子の会話を１年以上にわたって繰り返し録音して分析している。その事例を通して，友人と自分とのかかわりを描く物語の出現の時期や，友人の特徴記述の精緻化，会話における母子の役割の変化などについて，興味深い知見が得られた。

本論文は，母子の日常会話における子ども自身の経験に関する語りという日常的な活動がもつ意味を見出し，それに対して初めて心理学的に切り込んだ意欲的な論文である。自己概念などの研究に新たな道を開いた点で，今後の心理学的研究に重要な貢献をなすものと考えられ，博士（教育学）の学位論文として十分な水準に達しているものと認められる。